

入れ歯やブリッジやインプラントを利用していると、 幸福と感じている可能性が11～16%高い

自己評価による幸福感はwell-beingの大切な指標の一つです。しかし高齢者における口腔の状態と幸福感の研究は少ないです。本研究では、「歯の本数」と「歯科補綴物の使用」の2つの口腔の指標と、自己評価による幸福感の関係について調べました。2016年調査の横断研究による178,090人の高齢者の解析の結果、歯数が多いほど幸福感が高かったです。また、歯数が20歯以下の場合では、歯科補綴物を利用しない人に比べて、利用する人で幸福感が高かったです。歯数が20歯以上である人たちには、歯科補綴物の利用は幸福感と関係しませんでした。この結果は、歯の喪失を防ぐこと、そして歯が少ない人では歯科補綴物を使うことが、幸福感を上げる可能性を示唆しています。※本研究では、歯科補綴物の使用を、入れ歯(義歯)やブリッジ(取り外しのできない義歯)やデンタルインプラントの使用と定義しています。

お問合せ先:

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 健康推進歯学分野
教授 相田 潤 aida.ohp@tmd.ac.jp

東北大学大学院歯学研究科 国際歯科保健学分野
教授 小坂 健 osaka@m.tohoku.ac.jp

大学院生 ハゼム アツバス haz-60.res_koku_sai-1623@dc.tohoku.ac.jp

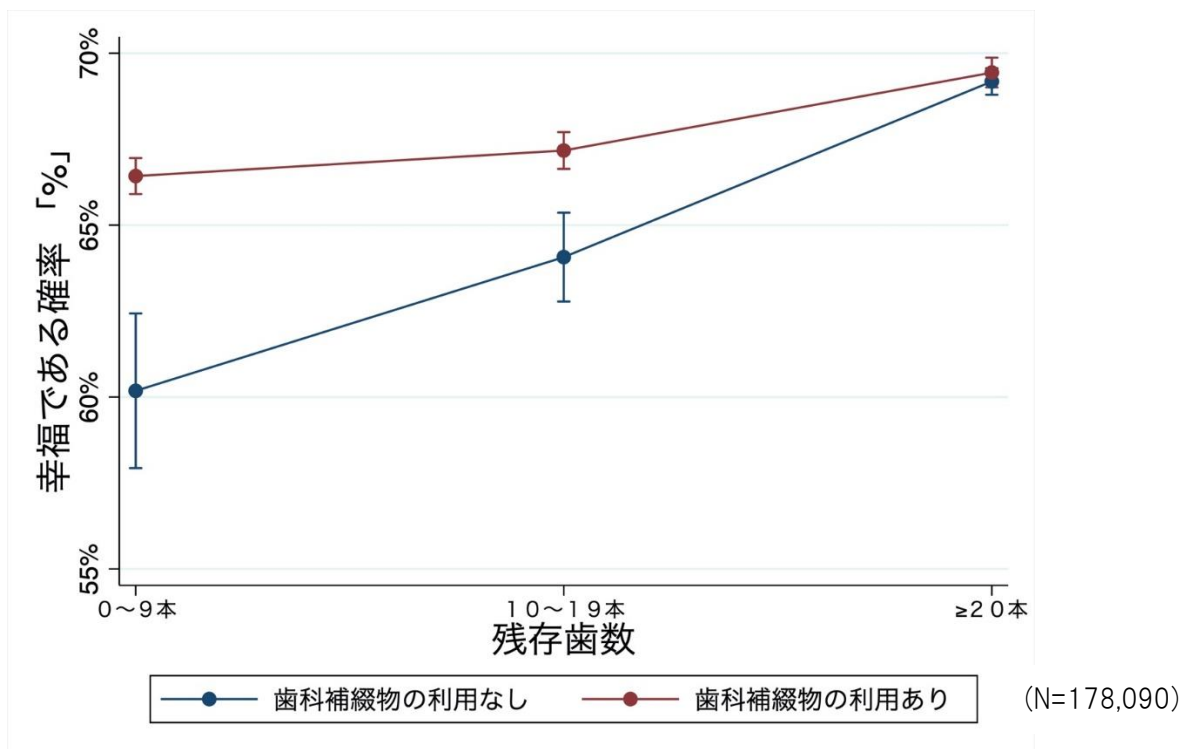


図1. 歯の本数と歯科補綴物の利用と自己評価による幸福感の関係:年齢、性別、配偶者の有無、教育歴、自己評価による健康状態、自己評価による経済状態とうつ病症状の有無を調整済み

■ 背景

高齢者の歯と幸福に関する先行研究は少ない状況です。JAGESの先行研究では、歯がない場合と比較して、歯が10本以上あると、毎日の笑いの頻度が高いことが示されました。しかし、歯と自己評価による幸福感との関連や、歯科補綴物の利用と自己評価による幸福感との関連について調べた研究はありません。本研究の目的は、日本の高齢者集団において、現在歯数および歯科補綴物の利用と自己評価による幸福感との関連を調査することでした。

■ 対象および方法

本研究では、要介護状態にない65歳以上の高齢者を対象とした日本老年学的評価研究(JAGES)の2016年に収集された調査データを用いました。全国47都道府県のうち18都道府県の39市区町村からデータを収集しました。自己評価による幸福度は、「現在自分はどの程度幸せだと感じているか」(とても不幸せを0点、とても幸せを10点)という質問に対して、0から10までの数値で回答してもらいました。7点以上を幸せ、6点以下を不幸せとしました。歯の本数に関する質問は、「現在ご自身の歯は何本残っていますか。さし歯や金属をかぶせた歯も自分の歯に含めます。なお、成人の歯の総本数は、親知らずを含めて32本です」(「0～9本」「10～19本」「20本以上」)を用いました。歯科補綴物の使用については、「入れ歯(義歯)やブリッジ(取り外しのできない義歯)やインプラントを使っていますか」(はい・いいえ)の質問を用いました。解析では、年齢、性別、配偶者の有無、学歴、自己評価による健康状態、自己評価による経済状況、うつ病の症状を持っていることの影響を除外しました。歯の本数と歯科補綴物の利用が自己評価による幸福度に及ぼす有病率比(PR)を算出しました。

■ 結果

解析に含めた男性81,489名(45.8%)、女性96,601名(54.2%)の178,090名の平均年齢は73.6±6.1歳でした。全体では66.4%が幸福だと回答していました。参加者の記述統計は表1のとおりです。表2が主な結果です。現在歯数が20本以上の人を除き、歯科補綴物を使用している人は、同じ歯数で歯科補綴物を使用していない同世代の人と比べて、幸福と感じている可能性が高いことが示されました。前頁の図1は、歯科補綴物を利用している人では、歯が少なくても幸福でない可能性が低いことを示しています。

表1. 参加者の記述統計(N=178,090)

	人数「%」	幸福感の Prevalence	
		はい「%」	いいえ「%」
歯本数と歯科補綴物			
0～9本と歯科補綴物不使用	3102 (1.7)	45.7	54.3
0～9本と歯科補綴物使用	41 424 (23.3)	61.5	38.5
10～19本と歯科補綴物不使用	6719 (3.8)	56.8	43.2
10～19本と歯科補綴物使用	31 592 (17.7)	65	35
≥20本と歯科補綴物不使用	52 525 (29.5)	70.5	29.5
≥20本と歯科補綴物使用	42 728 (24.0)	70.1	29.9

表2. multiple imputation後の歯本数、歯科補綴物使用不使用と自己評価による幸福感関係についてPoisson regression 分析(N=178,090)

	Crude モデル			全ての共変量で調整モデル*		
	PR	95% CI		PR	95% CI	
歯本数と歯科補綴物						
0～9本と歯科補綴物不使用	1.00			1.00		
0～9本と歯科補綴物使用	1.34	1.29	1.40	1.11	1.07	1.15
10～19本と歯科補綴物不使用	1.24	1.19	1.30	1.07	1.03	1.12
10～19本と歯科補綴物使用	1.42	1.37	1.48	1.13	1.09	1.17
≥20本と歯科補綴物不使用	1.54	1.48	1.60	1.16	1.12	1.20
≥20本と歯科補綴物使用	1.53	1.47	1.60	1.16	1.12	1.20

CI, confidence interval; PR, prevalence ratio. 太字は基準カテゴリです。

全てのp-values は統計的に有意であった P<.001.

*全ての共変量で調整された分析モデル(年齢、性別、配偶者の有無、教育歴、自己評価による健康状態、自己評価による経済状態とうつ病症状の有無を共変量として調整)

■ ディスカッション

この研究では、歯の数が多いことと歯科補綴物を使用していることが、幸福であることと独立して関連していることが示されました。歯科補綴物の使用は、歯が20本以下の人の幸福度を向上させるようです。歯や歯科補綴物の使用は、咀嚼、会話、自尊心、顔の魅力に影響し、幸福に似た結果であるQOLの向上と関連することが知られていますが、このことが幸福感にも影響するものと考えられます。

■ 意義

この結果は、歯の喪失を防ぐこと、そして歯が少ない人では歯科補綴物を使うことが、幸福感を上げる可能性を示唆しています。

■ 掲載論文

Abbas H, Aida J, Kondo K, Osaka K. Association among the number of teeth, dental prosthesis use, and subjective happiness: A cross-sectional study from the Japan Gerontological Evaluation study (JAGES). J Prosthet Dent. 2022 Apr 19:S0022-3913(22)00139-1. doi: 10.1016/j.prosdent.2022.02.014. Epub ahead of print. PMID: 35459542.

■ 謝辞

調査にご協力いただいた参加者の皆様に記してお礼申し上げます。本研究では、(日本老年学的評価研究)Japan Gerontological Evaluation Study(JAGES)のデータを使用しました。JAGES2016年調査は、JSPS科研(助成番号: JP19H03860)、厚生労働科学研究費補助金(H28-長寿-一般002, 21FA1013)、日本医療研究開発機構(AMED)(JP17dk0110017, JP18dk0110027, JP18ls0110002, JP18le0110009, JP20dk0110034, JP20dk0110037)、国立研究開発法人科学技術振興機構(OPERA, JPMJOP1831)、革新的自殺研究推進プログラム(1-4)、公益財団法人笹川スポーツ財団、公益財団法人健康・体づくり事業財団、公益財団法人千葉県民保健予防財団、公益財団法人8020推進財団の令和元年度8020公募研究事業(採択番号:19-2-06)、新見公立大学(1915010)、公益財団法人明治安田厚生事業団、国立研究開発法人国立長寿医療研究センター一長寿医療研究開発費(29-42, 30-22)の助成を受けて実施しました。